発達理論の学び舎

Back Number: Vol 77

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1521. 守破離と作曲における文体

1522. いつになったら私たちは

1523. 徒然なるままに

1524. 情報過食な現代人

1525. 自分なりの答えがあるか？

1526. 社会的に構成された社会問題と自由・不自由

1527. 離れられぬもの

1528. あの場所へ向かって

1529. 大伽藍の加護の下で

1530. 何度でも何度でも、何度でも

1531.「自分の日記」

1532. ためらいのない歩み

1533. 鏤骨

1534.「学習理論と教授法」「評価研究の理論と手法」のコースについて

1535. あの鳥の鳴き声のように

1536. 音楽体験の充実をもたらすもの

1537. コードトーンの抽出からの作曲

1538. 虚ろな目をした人々

1539. 一喝の音

1540. 台風のような一日

© YOHEI KATO 2018

1521. 守破離と作曲における文体

早朝からの雨が止むことなしに降り続けている。雨の勢いは随分と衰えたが、それでも今日は絶えず雨が地上に降り注いでいた。

午前中に、「実証的教育学」のコースでとりあげられる論文に目を通していた。自分の過去の研究の中で、他の研究者の研究結果を包括的に分析するようなメタ分析をして論文を執筆したことはこれまでない。

今朝読んでいた論文は、メタ分析を行う際に気をつけなければならないことを含め、とりわけ教育研究の領域においてメタ分析を行う際に注意しなければならないことを説明しているものだった。メタ分析を用いた論文を執筆したことはなく、またそのような論文を書く予定も当分ないのだが、当然ながらそれらの論文の知見は、自分の研究に間接的かつ直接的に有益だった。

というのも、本格的なメタ分析を行わなくても、一つの論文を執筆する際には、必ず過去の先行研究を調査する必要があり、その時に先ほど読んだ三つの論文の記載事項は非常に有益となる。メタ分析の際の注意点をここで挙げても仕方ないであろうから、今後の自分の研究内容を進めていく中で、特に文献調査の段階において、それらの論文の記述事項を体験とともに書き留めておくようにしたいと思う。

今日は作曲実践において、一つ嬉しいことがあった。現在、シンガポール国立大学が提供するクラシック音楽の作曲に関するMOOCの受講を通じて、徐々にだが、確実に作曲に関する自分の知識と技術が高まっているのを実感している。

午前中に論文をある程度読み込んだ後、休憩として作曲実践を行っていた際に、習った作曲理論を実際に活用してみると、その進歩を自ら確かめることができた。「雨に想うシューベルト」という12小節ほどの曲を作り、自分で聴いてみたところ、とりあえず曲らしい曲になった。これまでは聴くに耐えかねる曲しかできなかったが、やはり作曲理論という型を学び、音楽理論の基礎知識を習得したことによって、それなりの曲が生み出されたのだと思う。

© YOHEI KATO 2018

これは作曲実践のみならず、他の実践にも当てはまることだが、型というフレームワークは、決して表現を縛るものではないのだ。むしろ逆に、型というフレームワークがあるからこそ、真に自由な表現活動ができるのだと思う。仮に型がなければ、それは単なるカオス的表出物であり、真の表現物ではない。一つの形として表現するためには、形を生み出すための型が不可欠である。作曲理論や音楽理論というのは、まさに音楽言語を通じて自由な表現活動を行うために必須の型なのだと思う。

守破離という日本の伝統芸能の発達モデルに基づけば、必ず守の段階を踏まなければならない。今、作曲に関して、私はこの段階にいる。徹底的に型を身につけることを最優先とし、その実践に並行して、離の境地に至った偉大な作曲家の楽曲を丹念に分析し続けていく。

「守」の段階を徹底的に歩みながら、「離」の世界を見据えることによって、日々の作曲実践が徐々に自己の深層に立脚したものになっていき、「破」の段階に至るであろう。この時に初めて、自分なりの文体が曲の中に現れるはずだ。自然言語において各人固有の文体があるように、真に自らの個性を獲得した作曲家の曲には「文体」がある。

自らの文体の獲得に向けて、今日も夜にまた作曲実践に取り組みたいと思う。2017/9/8（金）

No.167: Program Evaluation and My Work

Whenever I learn something new, I always attempt to connect it with my previous knowledge and experience or my current interest.

Learning should be embodied in learners. Without linking leaning materials with our knowledge and experience or interest, what we learn will vanish into space.

I joined the first class of “Methods and Techniques of Evaluation Research” in the afternoon. It is a pivotal course this year in that it will provide me with rigorous theories and techniques of evaluation research. Evaluation research is a central component in my professional work.

In parallel with my scientific work, I have provided Japanese organizations——large business corporations——with consulting services about employee training. I have offered not only training

programs but also assessments to evaluate developmental stages of consciousness and skills. However, I realized that I needed more systematic knowledge and skills for program evaluation to monitor and improve the quality of my training programs. In fact, some of my clients have wanted such a program evaluation.

In terms of my scientific work, I would like to conduct research on MOOCs from a perspective of program evaluation. Monday, 9/11/2017

1522. いつになったら私たちは

自らの内側にある真実の声に耳を傾け、それをこの世界に表現した人たちに対して、私はいつも感銘を受けるとともに、大きな励ましを受ける。

この世界で自己を見出し、自らを世界に向けて表現していくことを果敢に行ってきた人たちに、私は多大な敬意を払っている。しかし、よくよく考えてみると、これは何かおかしいのではないかと思う。私たちはなぜ、自らの声を発見し、その声をこの世界に勇敢に表現した人たちに敬意を払うのだろうか。私たちは本来、固有の自己を見出し、自らの内側の真実の声に気付き、それをこの世界に表現することを宿命づけられた存在であるはずだ。

言うまでもなく、これは利己的な自己表現とは一線を画すものであり、この世界への関与を前提とした、固有の自己に立脚した普遍的な自己表現のことを指す。私が違和感を感じているのは、自らの声を発見することなく、それをこの世界に表明しないままに、それを行った者を不必要なまでに敬うその姿勢である。表現を変えれば、本質的に自己をこの世界に表現することを宿命づけられているはずの私たちが、その宿命と向き合わないままにそこから逸脱し、いつまでたってもこの世界に自己を確立することのできない状況を生み出す現代社会に違和感を覚えるのだ。

今、「宿命」という言葉を用いたが、これは確かに重たい意味を内包するものである。一方、自己を表現することは、真の意味での解放と自由を体現したものであり、そこには常にこの世界で生きる充実感と幸福感が伴うはずである。

本来、教育というのは解放と自由を私たちにもたらすものであったはずである。しかし、いつからか、教育というのは、呪縛と不自由さを私たちにもたらすものに成り果てた。

現代社会での教育が、ことごとく過去の偉人が残した知的資産を享受するだけに終始していることは、この問題と大きく関係しているだろう。知的資産の享受というよりも、単なる消費しかそこになく、自らが人類の知の形成に関わろうとするような姿勢を育むことはないのである。つまり、現代社会の教育においては、真に自己の声を見出し、それをこの世界の関与に向けて表現する方法を習得し、自己の表現を通じて人類の知の形成に参画するような意志と技術を育む機会が喪失しているのである。その結果私たちは、いつまでたっても、自らの声を表現することなく、それを行うことのできた人を単に崇めるだけで終わるのである。

フランスの小説家であるスタンダールはかつて、「私たちは、他人がどんなに偉かったかを一生かかって証明しようとする。それはなんて馬鹿げた人生だろうか」という趣旨の言葉を残した。

この言葉は洞察に満ちており、上述の問題の核心を突いているように思えて仕方ない。確かに、私たちが何かを表現しようとするとき、過去の人間たちが絶え間ない研鑽と実践によって蓄積した、知の遺産に立脚しながら表現活動に従事する必要がある。その点においては、自己表現をする際に、過去の人間が積み上げた仕事を参照することは大切だ。

自らの声をこの世界に表明する際に、そうした人類の過去の知に立脚することは大事でありながらも、そうした知を自己の声の表明のために用いるのではなく、単に消費したり、盲目的に崇め奉るのはおかしなことではないだろうか。

私たちは、他人がどんなに偉かったかを証明するために生まれてきたわけではないはずである。私たちは、この世界に唯一の個としての自分を見出し、それをこの世界に表明することを通じて社会に参画し、自己表現を通じて生の充実感と幸福感を感じながら毎日を生きるために生まれてきたはずである。

いつになったらやめるのだろうか。いつになったら、私たちは他人の人生を崇め、自分の人生を惨めに思うことをやめるのだろうか。そしていつになったら、自分の人生は本当に尊いものであるという

ことに気づくのだろうか。なぜ私たちは、自分の声をこの世界に表明し、世界に参画することを通じて、日々の瞬間瞬間に充実感と幸福感を感じるように生きようとしないのか。

いつまで私たちは自分に対して嘘をつきながら生きるのか。現代人は、絶対に嘘をついてはならぬ人に嘘をつく、大嘘つき以外の何者でもない。2017/9/8(金)

No.168: To Deliver Our Inner Voices to Others

A sweet-toned song of a bird reverberated around the dark surroundings in the early morning. It reached the core of my existence. The sound continued to echo within me.

Why did it happen to me? Why did the birdsong resonate with me?

The simple but essential reason is that the bird uttered its voice from the center of the existence. That is why the voice was directly delivered to me.

How many people express their inner voices with a steadfast resolution? Unless we express our voices from the center of ourselves, they never reach others' hearts.

We have two choices; to express our inner voices with an iron will to penetrate our voices into the inner universe of others or to express our untruthful voices to vanish them into space.

Which do we choose? Tuesday, 9/12/2017

1523. 徒然なるままに

昨日の激しい雨はどこかに消え、闇に包まれた早朝の景色が静かにたたずんでいる。いよいよ今日は、『成人発達理論による能力の成長』の出版を記念したオンラインゼミナールの最後のクラスとなる。およそ二ヶ月半にわたって行われたゼミナールは、私にとっても非常に有意義なものだった。

昨夜はまた印象的な夢を見た。それは視覚的に印象的だったというよりも感覚的にである。起床した今も、夢の中で体験した感覚が自分の内側に残り続けている。端的に言えば、それは力強い夢

であり、自分の中の熱量を外側に表現するような夢だった。見方によっては、それは攻撃的な夢だと言えるかもしれない。

虚飾に満ちた自己防衛的かつ軟弱な権威を打ち砕こうとするような夢。夢の中でシンボルとして現れる権威的人物を、自分の言葉や身体で木っ端微塵にするような夢。

自己の声のようなものがあっても、それが個的領域を超えておらず、普遍的領域に至っていないがゆえに、非常に独りよがりに聞こえる権威たちの声。その声にこちらから声をかけると、過度に防衛的になり、さらには攻撃的になる。

以前の夢に出てきたように、自己の中にある小さな自我は、一度粉々にされ、徹底的に焼き尽くされる必要がある。その体験がなければ、個的領域を超出し、真に一つの個を自分の中に見出すことはできず、普遍的領域に参入することなどできはしない。

昨夜の夢の中で私は、シンボルとして立ち現れた権威的人物を粉砕し、焼き尽くそうとするような意志を持っていた。それはシンボルとしての他者に対してなされたものであるのと同時に、それは自分に対して行った行為であることも確かだろう。つまり、夢のシンボルが持つ小さな自我を打ち砕き、それを焼き払おうとすることは、ひるがえって、自分の小さな自我を粉砕し、それを業火で焼き尽くそうとする行為に他ならないということである。この種の夢を見るときには大抵、夢の中で登場した権威的人物の顔をはっきりと覚えている。

しかし、昨夜の夢に関しては覚えていない。もはや顔を覚えていない権威的人物が誰だったのかは気になるところである。

昨夜の夢について静かに振り返っていると、雨が書斎の窓ガラスにポツポツとぶつかる音が聞こえ始めた。今日もどうやら雨のようだ。

徒然なるままに。以前の日記で書き留めていたように、日記文学や随筆文学に着目をし始めた時、私は吉田兼好の『徒然草』と出会った。

「つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」という兼好の言葉。そこには、この瞬間にくつろいだ意識の中で湧き上がるとりとめもないことを書き付けていくという兼好の生き様が見える。

その他の活動にせわしなく従事するのではなく、あえてその他のことは何もしないという積極的な態度を持って、自分の内側に起こる現象を見つめ、それを書き綴っていくという態度。誰が見ている見ていないにかかわらず、書き続けること。

その瞬間にくつろぎ、自己にくつろぐことを通じて見えてくるものに言葉を与え、それを形としてこの世界に表現すること。吉田兼好は、そうした生き方を徹底的に推し進めた人物だったのだと思う。

徒然なるままに。この世界でせわしなく流されながら生きるのと、絶えず自己を見つめながら流れの中で生きることは似て非なるものである。

兼好のように、徒然なるままに日々の自分の内面世界に立ち現れる由無し事を書き綴っていくことは、ありとあらゆる事柄が空虚に過ぎ去って行くこうした世の中にあって、とても重要な生活実践であるように私には思える。2017/9/9(土)

No.169: Following in the Footsteps of Great Composers

I composed music by the technique of textual reduction today. I applied it to Mozart's Piano Sonata No.16 in C major. Then I analyzed the chord progression. After the analysis, I made a small piece of piano work. It is quite small, but my own creation made me lively and elevated.

This is the kernel of creating own music. I am just following in the footsteps of great predecessors, so I have to express my deep gratitude to remarkable composers in the past. Succeeding to their heritage, I would like to create my own music. Tuesday, 9/12/2017

1524. 情報過食な現代人

今朝も足元が冷え、暖房をつけようかと一瞬思ったが、やはり暖房をつけるには早すぎるだろうということで、暖かい格好をして朝を過ごすことにした。

雨がしとしとと降りしきる中、これから一日の仕事を始めていきたいと思う。「実証的教育学」のコースで課せられている論文を今日はできれば四本ほど読みたい。

午前中にオンラインゼミナールのクラスがあるため、その前に一本ほど読み終えることができたらと思う。昼食前にクラスを終えると、そこからまた一本論文を読み、昼食後には少しばかり作曲実践を行う。昼寝を挟んで夕方からは再び学術論文を読むことに多くの時間を充て、夜には再び作曲実践を行いたい。そのような形で土曜日が過ぎていくことになるだろう。

昨夜の就寝前に、必要な情報だけを受け取るようにし、情報の受容過多になることを避けなければならないと思った。確かに今日は、四本ほどの論文を読むが、それは自分に必要な情報であり、それ以外に他者が作り上げた情報とは向き合わないようにしたい。

テレビや新聞を全く見ない生活を始めてから、10年ほどの時間が経った。今はオンラインゼミナールの都合上、フェイスブックを活用しているが、明日のクラスをもってして、フェイスブックのアカウントを閉じようと思う。もちろん、何か重要な報告事項があれば、その前後数日だけアカウントを開くことがあると思うが、基本的にはソーシャルメディアの類は一切使わないようにする。

現代人は、情報過食であり、情報のデトックスが必要な状況に置かれているように思う。情報を暴飲暴食するあまり、自己の内側にある大切なものが見えなくなっている人があまりに多い。その様子はどこか、もはや自分の認識の光が自己の本質を照らし出せないぐらいに、不必要な情報の脂が自分の内面世界の中に堆積しているかのようである。

自己の外側から情報を得ることを渇望するのではなく、その代わりに、自分の内側から出すべきものを出していく必要があるのではないかと切実に思う。内側から出すべきものとは、自分の内側の声である。それを形として外側に出すのだ。この実践を行わない限り、不必要な情報が私たちの自己に堆積し続けることになるだろう。

内側の声を発見し、それを形としてこの世界に表現するというのは、実践というよりもむしろ、それを習慣にする必要があるように思う。いやさらには、それは習慣を超えたものでなければならない。なぜなら、自らの声を発見し、それをこの世界に具現化していくことが、その人の人生を真に生きるこ

とに他ならないからである。それは実践でも習慣でもなく、真に生きることに他ならないのだ。であれば、現在人の中で真に自らの生を生きている人などほとんどいない。2017/9/9(土)

No.170: Stock of Chord Progressions with Chord Tones

Analyzing chord progressions and chord tones of masterpieces in classical music is my daily practice for music composition. The more I engage in this practice, the more I can establish deep knowledge about the characteristics and structures of masterpieces. This practice cultivates not only my knowledge but also my skills to compose music.

Whenever I analyze chord progressions and chord tones, I always try to apply them to my music composition. More specifically, I arrange chord tones of masterpieces and create my own work.

I convince myself that the stock of chord progressions and chord tones will be essential raw materials to compose music. Therefore, I will keep accumulating them with reference not to forget whose work I owe to. Tuesday, 9/12/2017

1525. 自分なりの答えがあるか？

ノルウェーのあの雄大な景観を彷彿させるようなエドヴァルド・グリーグのピアノ曲が流れる時、その場に静かにたたずむ自分がいた。何か尊い瞬間が訪れ、その瞬間をいつまでも感じていたいという気持ち。そうした気持ちとは裏腹に、その尊い瞬間が去った後に残る、あのどことなく切ない気持ちの中に今の自分がいる。切ないと感じさせるこの感覚の衣を恐る恐る取り除き、その本質的な感情に焦点を当てると、それは感謝の念だった。

今、私は決して切なさの中にいるのではなく、豊穣な感謝の念に抱擁されているのだという確かな感覚がある。その感覚の中に身を委ね、過ぎ去ったその瞬間に対して独坐観念を行っている。

先ほど、およそ二ヶ月半にわたって開催していたオンラインゼミナールの全てのクラスが終了した。多くの方々が参加してくださった今回のゼミナールが終了し、何かが終わるということは始まりを意味するということを自己の深層から理解し、終わりが始まりになるその瞬間を見届けるかのように、書斎の机の前で静かに座していた。

何かを終え、何かを始めるにあたって、終わりを告げたものを真に噛みしめることがなければ、次の始まりはないのではないだろうか。体験から体験に飛び移ってはならない。

一つの体験があるべき時間をかけてあるべき姿に完了していくまで、他の活動に乗り出してはならない。そんなことを思いながら、私はただ静かに椅子に腰掛けていた。

書斎の窓の向こうには、小雨がしきりに降り続いている。一粒一粒の雨滴がどことなく愛おしい。

今回のゼミナールに参加してくださった方々は、私を含め、他者の成長に関与しながら、自己そのものを深めていく実践に従事しているのだと思う。私たちという存在は固有の歴史を持ち、なおかつ自己を超えた存在を常に内包しているという特徴を持つ。つまり、自己の中には常に自己を超えた存在が内在しているということだ。

発達の要諦というのは、その語源にあるように、「開く」ということであり、支援者がなすべきことはこの「開く」という本質現象を支えることなのだと思う。支援者はいわば、他者の現在の自己とその先に待つ今の自己を超えた存在との間に立つ中間者であり、開くというプロセスに触れるという意味で媒介者である。支援者に求められるのは、傍観でも強制でもなく、媒介的関与なのだ。

他者の中にすでに宿っている今の自分を超えた存在へと、他者を開いていくプロセスに関与することが、支援者に求められる役割なのではないだろうか。そして私たちは、もう一つ重要な事柄を考える必要がある。

確かに、自己を深め、他者の成長支援を行っていくことは尊い営みである。しかし、ここで考えてみなければならないことは、「私たちが生きていく中で、成長や発達よりも大切なことは何だろうか？」という問いである。この問いと向き合い、その問いに対する自分なりの答えを持つこと。それは暫定的な答えであっても構わない。

とにかく、この人生の中で、成長や発達よりも大切なことが何かを、私たちは自分で見つけ出さなければならない。さもなければ、現代社会で蔓延する成長主義的な物語に絡め取られ、成長や発達の本質を見失うことになるだろう。

© YOHEI KATO 2018

現代社会に浸透する成長主義的な物語の枠組みの中で成長や発達を捉えている限り、自己が真に深まることなどなく、他者の成長を支えることなどできはしない。既存の物語の中にいてはダメなのだ。

既存の物語から抜け出し、今この世界に存在していない新たな発想の枠組みで成長や発達を捉えていく必要がある。個人・組織・社会の成長や発達を真に実現させていこうとするとき、自分の中で、先ほどの問いに答えられるかがカギを握るだろう。その答えを自分の中に見つけることができたのであれば、それは、成長や発達を取り巻く既存の物語から一歩外に出たことを示唆している。

私たちの人生において、成長や発達よりも大切なことは何だろうか？この問いに対して正しい答えや間違った答えなどない。あるのは、自分の中に自分なりの答えがあるかどうかだ。2017/9/9(土)

No.171: Our Brains and Learning

The continuous learning cycle from the prefrontal cortex and older regions in the brain fosters our learning. In general, we activate the prefrontal cortex when we learn something new. As we continue to learn──as we construct our knowledge and skills, we less and less rely on the region in the brain.

Instead, our performance is executed, activating the older regions in the brain that have existed for thousands of years. Roughly speaking, the prefrontal cortex deals with our thoughts, whereas older regions (e.g., the parietal lobe and the temporal lobe) in the brain cope with our senses and feelings.

Our learning should activate not only the prefrontal cortex but also older regions in the brain so that we can master learning materials in a deeper way and embody them into our practice more richly. Tuesday, 9/12/2017

1526. 社会的に構成された社会問題と自由・不自由

午後から天気が回復し、すっかり雨が止んだ。目の前の木々の葉が小刻みに夕方の風に揺られている。木々をよくよく眺めてみると、それらのいくつかは紅葉を始めている。紅葉を始める木々を眺

めていると、彼らはすでに新しい季節に向かって準備を始めているようだ。私もそろそろ準備を始める必要があるだろう。これは当然ながら、外面的な季節の変化に向けての準備を意味するだけではなく、内面的な季節の変化に向けての準備を意味している。

次の季節を迎え、それが終わる時、また一つ何かが自分の内側で深まっているであろうという確信がある。

先ほど、実証的教育学に関する論文を四本ほど読み終えた。今日はまだ時間があるから、さらに二つほど追加して論文を読みたいと思う。今の主眼は兎にも角にも、プログラム評価だ。これは企業向けの人財育成トレーニングのプログラム評価を含みながら、より大きな教育政策などの評価も含む。

人間の発達に関するトレーニング方法を開発することをここ数年間行っていたが、そこからさらに、トレーニングプログラム自体の評価に自分の関心が向かうとは思ってもみなかったことである。一つの関心領域を深めていくと、関心が新たな関心を呼び、専門領域の水平的な拡張と同時に、垂直的な深化が起こるのだということを身を持って感じている。

今学期はよほどの余裕がない限り、現在受講しているコースで取り上げられている専門書や論文以外には手を広げないようにしたいと思う。それだけ今は、実証的教育学の理論と手法を学ぶことに専念したいと思う。仮にそれら以外の専門書や論文を読むのであれば、書斎の机の上に今積まれている七冊の書籍と自分の研究に必要な論文だけにしたいと思う。

先ほど論文を読んでいた時に、「社会問題」と呼ばれるものの実態とそれへの関与について少しばかり考えを巡らせていた。そもそも社会問題というのは、社会的に構築された構成概念であるということが忘れられがちである。そして、科学者や学者がそうした概念を生み出すことに携わっていることを見落としてはならない。

当然ながら、科学者や学者が社会問題としてある現象を概念化することによって、そこから研究が進んだり、問題に対する打ち手が見つかったりする。しかし気をつけなければならないのは、世の中の現象を不必要に概念化し、それが結果として思ってもいなかった形で社会問題として定式化

されることである。さらに、そのように不必要に生み出された社会問題に対して、不必要な関与というものが企てられる可能性もある。

世間で社会問題と叫ばれていることの裏には、実は政治的・経済的な癒着と共謀が潜んでおり、科学者や学者が不必要に社会問題を概念的に作り上げている場合が少なからずあるのではないかと思う。この話は先ほど自分が考えていたことと繋がっている。

人は本質的に自由であるはずなのに、なぜ私たちは自由を感じることができないのか？それは自由という言葉があるからではないか、ということを考えていた。自由という言葉が生まれた瞬間に、私たちは自由を喪失したのである。あるいは、自由という言葉が生み出されたことによって、自由を真に享受することが非常に困難になったのだ。

言葉というのは本質的に分節化能力を持つ。現実世界を切り取り、特定の対象を明瞭にする形で認識することに関して、言葉は不可欠である。しかしよくよくその性質を考えてみると、ひとたび一つの言葉が生み出されると、その言葉によって切り取られたものと、切り取られなかったものの区別が生じるのである。

自由という言葉を例にとってみれば、その言葉が生み出された瞬間に、「自由でないもの」が対置される形で生み出されたのだ。ひとたび生まれた言葉を白紙に戻すことなどできないため、私たちがもう一度真の自由を享受するためには、「自由」という言葉によって切り出されたものの性質を自分で精査し、その言葉によって対置された「自由でないもの」が一体何であるかを捉え直す必要があるように思う。

そのようなことを先ほど考えていたのだと思い出していると、夕方のフローニンゲンの空に晴れ間が広がった。ここからまた論文を二本読み、夕食後に作曲実践を行いたい。今日も普段と変わらない形で一日を終えることになるだろう。2017/9/9（土）

No.172: The Atypical Weather in Groningen

A stormy wind is blowing outside. The recent weather in Groningen is very volatile.

The erratic weather is the epitome of dynamic systems. Yet, the recent turbulence of the weather in Groningen is unusual.

My memory tells me that it was not like this last year. I should avoid a hasty conclusion that the current weather is atypical because I have only two data points; the weather last year and that of this year.

What if the weather last year was unusual? If that is the case, the weather I am seeing right now is usual. Wednesday, 9/13/2017

1527. 離れられぬもの

漆黒の闇に包まれた日曜日の朝。今朝は五時半に起床し、今日が日曜日であるということを忘れてしまうぐらいに、内側も外側も平日と全く変わらない。ただし、今日は少しばかり、外の世界の闇の光沢の美しさに息を飲んだ。辺りにはまだ街灯だけしか灯っておらず、その光だけが目にみえる。その他には、街灯に照らされた木々がうっすらと見えるぐらいだろうか。

フローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まってからの最初の日曜日を迎えた。起床直後に普段と同じようにお茶を入れた時、今日は学術研究に関する専門書や論文は一切読まないようにしようと思った。実は昨日の夜に、今日は午前中だけ専門書や論文を読もうと思っていたのだが、それすらもやめて、今日は専門書や論文からはあえて離れる。

このあえて離れるということがどれほど自分にとって苦しいことか。学術研究とは一日たりとも離れられないという性分を持ち、そこに向かわせる衝動が内側にあるのを知っている。だが、あえて離れるのだ。オランダでの二年目の生活では、日曜日だけは学術研究からあえて離れるという、自分にとって最難関なことに挑戦してみたいと思う。

以前の日記の中で、「対象の深くに入り込むためには一度対象から離れる必要がある」ということを書いていたように思う。まさにそれを実行するのである。対象から一度距離を取ると、不思議なことに、次に対象と向き合う時、これまでは見えなかった視界が広がっていることが往々にしてある。よくよく考えてみると、これは納得のできることだろう。

対象から心理的にも物理的にも距離を取ると、離れた地点に一度私たちは立つことになる。対象から離れられないでいた時には、対象との間に距離がないために、見える視界がどうしても限定されるのだ。対象と距離を取り、再び対象に帰ってくる時には、その地点から対象を一度眺め、そこから対象に戻るまでの全景色を眺めることができる。その過程で得られるものが計り知れないのだ。

また、対象と距離を取るというのは、対象と自己との間に探究空間なるものを生み出す気がしてならない。これは対象に対する考えを深めるために非常に重要な空間である。なぜなら、対象と自己との間に存在するこの空間が、対象のさらなる理解につながる無数のアイデアを生み出すからである。

探究空間は一見すると何もないスペースのように思えるかもしれないが、それは誤解であり、有で満たされた豊かな無の空間なのである。この空間から対象に対する思考や感覚が無数に溢れ出すのである。

ここまでのところ、簡単に対象からあえて離れることの意義を自分なりに書き出してみた。もう一つ重要なことを付け加えるならば、対象と離れることは、対象を寝かせるという意味で大切だ。言い換えると、探究を熟成させるという意味でそれは非常に大切なのだ。

ある対象を深く理解するためには、どうしても時の発酵過程に自らの探究を晒す必要がある。その一つの手段がまさに、探究対象から一度距離を取るということなのだ。

対象から距離を取ることの大切さをいくつか列挙してみた後に思うのは、それでも自分が学術研究からたった一日でも距離を取ることが難しいということだ。正直なところ、やはり今日も学術研究から離れることはできないかもしれない、という弱気な力強い気持ちを自分の内側に感じる。

学術研究というものがもはや単なる仕事なのではなく、自分の人生そのものなのだということを実感する。自分の人生そのものから離れることはひどく難しい。

抑えることのできない探究衝動をあえて抑圧する必要はやはりなく、午前中だけ専門書を読み、午後から就寝にかけては作曲実践を行い、久しぶりに和書を読むことにしたい。半日ほど学術研究から離れることからまずは実践に移す。

© YOHEI KATO 2018

一日離れることは今の自分にとっては刺激が強すぎるようだ。その刺激に耐えられるようになるには、半日離れるということをしばらく続ける必要があるだろう。2017/9/10(日)

【追記】

上記の日記を執筆してから一年経ったが、それまでの期間において、丸一日学術探究から離れる日はなかったように思う。もはや、それから離れる必要などないのだろう。上記の日記でも示唆しているように、学術探究がすでに自分の人生と不可分のものであり、人生に他ならないのであるから、一日たりとも離れる必要などないのである。フローニンゲン:2018/11/19(月)20:17

No.173: A School Improvement Plan

I participated in the first class of "Evidence-Based Education" in the morning. Almost all of the contents in this course are closely linked with my current work as a researcher and consultant.

Although my current interest is adult education, it is a good opportunity to focus on primary and secondary education through this course. Since human development is a comprehensive process from birth to death, I need to deepen my understanding of child education.

The final assignment in this course looks intriguing. It requires to develop a school improvement plan for a case study that represents a realistic school quality issue.

I intuitively came up with an idea of gifted education in a school. The term "gifted education" has recently been paid attention to in Japan, but I can imagine that most schools are confronting an implementation issue about how to incorporate gifted education in school.

My aim in this improvement plan would be providing (1) scientific evidence of the effectiveness of gifted education, (2) a strategic implementation plan, and (3) evaluation of the plan. I will elaborate my thoughts on this assignment this weekend. Wednesday, 9/13/2017

1528. あの場所へ向かって

読みに読み、書きに書き、作りに作ることで埋め尽くされた生活。それら以外のことに従事しない生活の実現に向けて、今日も読みに読み、書きに書き、作るに作る。

そうした生活態度は自分の内側で徐々に確固たるものとして構築されつつある。あとは外的環境を整えることだけになりつつある。これはどの国で生活をし、どの大学で仕事を続けていくかということと密接に関係している。住環境にせよ、経済環境にせよ、そうした外的環境を完全に整備するまでにはもう少し時間がかかるかもしれないが、少しずつ自分を取り巻く環境が整い始めていることを感じる。

読みに読み、書きに書き、作りに作ることだけに専念できる外的環境の中で日々を生きていくためには、兎にも角にも今自分が行っている取り組みに集中する必要があるだろう。それを蔑ろにしていては、そうした外部環境の中で、自分が心底希求する生き方を実現させていくことは難しいだろう。

来年の今頃は、もしかすると再び米国で生活をしているかもしれない。仮にそこで生活を始めたら、今度は間違いなくそこに捕まると思う。つまり、次の生活拠点はおそらく今後の自分の活動を根幹から支えるものとあり、そこには長く居住するような予感がするのだ。

少なくとも5年以上、もしかすると10年ほど、下手をするとそれ以上の期間をその場所で過ごすかもしれない。どうも私には、これまでの人生や今の生活というものが、その場所に行くためにあったとしか思えないことがよくある。その場所には遥か昔に呼ばれているのだが、長い年月をかけてようやくそこに辿り着くというような感覚があるのだ。

その場所に真に辿り着くためには、オランダでの今の生活を静かに完全燃焼させていかなければならない。その先に始めて次の場所が現実のものとして姿を表すだろう。

「あぁ、同じことを考えていた」「あっ、それは自分もイメージしていたことだ」という頻繁に耳にする言葉を思い返したとき、それでは私たちは同じ夢を見るのだろうかということを考えていた。これは完

全に同一でなくてもいい、ただし、それが同じ夢だったと言えるような精度と確度を持つ夢を別々の人が見ることは可能なのだろうか、ということに関心を持った。

昨夜見た私の夢は、この世界の誰かも同時に見ていたのだろうか。あるいは、過去の人間が昨日の私の夢をすでに見ていたということは可能なのだろうか？そうしたことを考えることは可能である。なぜならもうそれを考えてしまったからだ。

表層意識下で同一イメージを共有することができるのであれば、深層意識下でもそれは十分に可能なのではないだろうか。しかも夢という形においてである。さらには、夢が夢を見るという事態についてはどうだろう。夢を見る主体は私たちではなく、夢そのものなのかもしれないという前提を置いてみるのだ。それはとても滑稽な前提なのだが、現象を生み出していると思っていた原因的主体が、実は別に存在している可能性を考える上で極めて重要な発想に思える。

昨夜の夢も少しばかり印象に残っている。完全にドアが閉められた教室の中で、私の旧友や比較的最近知り合った知人が教室の机につき、一つの話で盛り上がっていた。もちろん私もその輪の中にいて、盛り上がる話に参加していた。

すると、私の方から冗談交じりな提案で、「ここにいるA君が生きるためには、各人から5本の髪の毛を寄付してもらうことが必要なんです」と述べた。その場にいたのは、すでに大の大人たちなのだが、私の発言を真剣に受け止め、その場にいた全員が5本きっかり髪の毛を抜こうと必死になっていた。

長らくお世話になっている知人の一人が巧みにも、箸を使って数少ない自分の髪の毛を抜き、5本の髪の毛を箸に掴んだまま持ってきた。私はその方にお礼を述べ、続々と自分の髪の毛をA君のもとに持ってくる他の人たちの様子を眺めていた。

この寄付活動が終わったところで、再び議論に花が咲いた。あまりの盛り上がりに、ドアを閉めていたにもかかわらず、向かい側の教室で授業をしていた教師が「うるさい！」と叫びだした。そして、その教師が怒りの表情を維持したまま私たちの教室に入ってきた。

© YOHEI KATO 2018

その直後に、私たちの担任の教師が教室に入り、何事もなかったかのように、とても静かな空気の中で、音楽に関する話をし始めた。私は自分の机を見つめ、うつ向いたまま作曲に取り組み始めた。そこで夢から覚めた。

昨夜の夢も別の誰かが見たことのあるものなのだろうか。さらには、昨夜の夢を見ていたのは自分という主体ではなく、実は夢があの夢を見ていたと考えることはできないだろうか、ということを考えていた。2017/9/10(日)

No.174: The Importance of Philosophy of Education

In the afternoon, I was pondering the importance of philosophy of education. This theme comes to mind again and again. Because I have recently spent much time and energy to engage in scientific research, I often miss philosophical discourses. In particular, discourses on human development and education have captured me for a long time. I may embark on engaging in philosophy of education in a rigorous way in my near future. Wednesday, 9/13/2017

1529. 大伽藍の加護の下で

激しい嵐が通り過ぎ、全てのものが吹き飛ばされ、世界がもう一度始まり直すかのような感覚を体験するような日だった。怒涛のような感情の流れの後にやってきたのは、息を呑むほどの静けさであり、そこからまた新しい世界が始まったかのような感覚だった。それを経験したのは、拙書『成人発達理論による能力の成長』を取り上げたオンラインゼミナールの最後のクラスの後だった。

形式上、今日で完全にゼミナールを終えた。何かを終えることはこれほどまでに難しいことなのだろうか。そもそも、この世界に完全なる休止符を打てる現象など存在するのだろうか。宇宙の誕生にせよ、私たちの生命の誕生にせよ、その本当の始まりを特定することなどできない。また、その終わりを特定することなどできはしない。

一人の人間が生涯を閉じる時、それは果てして終わりを意味するのだろうか。いや、そんなことは決してない。一つの生涯を閉じて、今なお生き続けている過去の偉人たちを私は何人も知っている。そうした点において、人生には始まりもなければ終わりもないのではないだろうか。

「それを始めたきっかけはなんだったのでしょうか？」という問いを投げかけられ、その返答に困ったことはないだろうか。暫定的にその問いに答えを提示してみたところ、果たしてそれが本当にそれを始めた根本のきっかけだったのかと疑った経験はないだろうか。

自分が提示した回答よりも実はもっとずっとその始まりの歴史は古く、そのきっかけはもはや私たちの人生が始まる前からあったのではないか、と考えた経験が誰しもあるのではないだろうか。事物の始まりや終わりを特定することはそれほどまでに難しいのだ。

もしかすると、そうした試みは不毛なのかもしれない。今回のゼミナールの形式上の終わりは、やはり終わりを意味しない。そもそもそれは終わってなどいないし、始まってさえもいなかったのかもしれない。ただそれが、あるべきところにあるべき形であったのだ。

今回のゼミナールが形式上始まったのはいつだったのだろうか。書籍を世に送り出した時なのか？書籍を執筆しようと思い立った時なのか？今から四年前にカート・フィッシャー教授に会った時なのだろうか？それとも私が今から六年前に会社を辞め、米国に渡って発達心理学を学び始めた時なのだろうか？

いや、始まりはもっとずっと前にあり、それは「ある」と言えないほど遥か昔にあったかのような、始まりなき始まりの時だったように思える。

そのように考えてみる時、全ての事物の始まりと終わりは、「非在」という「存在」として捉えることができるのではないだろうか。「非ずして在る」という、この始まりと終わりの不思議さに吸い込まれたような経験を本日したのである。その感覚が落ち着きを見せた時、私はまたどこかに向かって歩き出そうとしていた。再び歩みを始めた私は何かの中に居続けていた。

無数の刹那で創り上げられた大伽藍の中に私は居続けていたのである。いや、この世界の誰しもが、この大伽藍の外に出たことなど一度もなく、そんなことはできないのだ。私たちは、この無数の刹那で創り上げられた大伽藍の加護を受け続けているのである。今この瞬間それに気づくことはできないだろうか。2017/9/10（日）

© YOHEI KATO 2018

No.175: Evidence-Based Education and Value-Based Education

I read an insightful article about evidence-based education and value-based education. Needless to say, evidence-based education is effective to improve the quality of education. However, especially educators have to pay attention to how to use scientific evidence.

It should be avoided that educators simply apply scientific evidence to their practice without any consideration. More specifically, they must eschew emphasizing only evidence-based educational research because value judgment always involves in educational practice.

Imagining an extreme example that one scientifically proven fact is highly effective for enhancing learning but it is ethically unacceptable, what should educators do? Of course, one of the main purposes of education is to foster learning, but education should be provided under ethical principles.

I have recently seen some educational practice whose purpose is just to enhance development of children without any ethical discourses. Hence, I would like to insist that educators should integrate both evidence-based judgment and value judgment. This issue seizes my interest, and thus I will explore it from perspectives of philosophy of education. Wednesday, 9/13/2017

1530. 何度でも何度でも、何度でも

そよそよと優しい風が、夕暮れのフローニンゲンの街を通り抜けていく。

「あなたの人生の主題は何ですか？ええ、自分だけの主題です。この世界にたった一つのあなただけの人生の主題は何でしょうか？」と問われたら、何と答えるだろうか。

「それは・・・わかりません」と私なら答えてしまうかもしれない。だが、今日改めて、人や社会が発達するというテーマが自分にとってどれほど大きな意味を持つものなのかを教えられた。

人や社会の発達について考えるだけで言葉を失ってしまう時があるのだ。それについて考えるだけで思考が消え失せ、涙しか流れない時があるのだ。これは一体何を示唆する現象なのだろうか。人

や社会の発達というテーマに思考の矢を真剣に向けた時、その矢が一瞬にして折れ、自分がただ涙を流しながら震えていることがよくある。

今日もそれに見舞われた。ここ最近私は頻繁に、この現代社会を取り巻く集合的な影と自分が切っても切り離せない関係にあることに気づく。

たった一人の力では、その治癒も変容もなし得ぬことを承知しながら、その影の中に入っていく自分がいるようだ。自己の存在を一瞬にして飲み込むような、ドロドロとした巨大な影に向かっていく自分は何をしようとしているのだろうか。

何もできないとわかりながら、なぜそこに入っていくのだろうか。影の世界からこちらの世界に戻ってきた時、つかの間の時間が再び動き出す。だが、私たちが意識しないところに私たちの背中があるように、その影は常に私の後ろにいる。人や社会の発達というテーマと表裏をなしているのは、人や社会の影なのだ。

私たちが現代社会の影を治癒し、変容を遂げていくためには何が必要なのだろうか。影の治癒で最も重要なことは、影を切り離すことではなく、影に光を当て、光の中でその影を再所有することだと考えられている。また、発達という現象が今は姿を見せぬ形なきものに向かっていく運動であるならば、社会の変容に必要なことは、未だ形のなきものを社会に投げかけていくことなのかもしれない。

私たち一人一人が異なった声を持つのはなぜなのだろうか。なぜ、この世界には一つとして同じ声がないのだろうか。

声。それは身体から発せられる声であり、心から発せられる声の両方を指す。

普段、人は誰しも、自分の身体から声を発する。だが、この現代社会のほとんどの人が、自分の心の声を発しないのはなぜなのだろか。

心の声をこの世界に表明することがいかに難しいかは知っている。しかし、そもそもなぜ私たちには各人固有の心の声が備わっているのかを考えてみる必要はないだろうか？

© YOHEI KATO 2018

各人固有の声があるのは、それをこの世界に発するためなのではないだろうか。社会の影に光を当て、未だ形のなきものを社会に投げかけていくことにつながるのであれば、私は自分の声を発したいと思う。自分の声があの巨大な影に何度かき消されようが関係ない。何度でも叫びたいし、それが他の誰かの声を呼ぶことになりはしないだろうか。2017/9/10(日)

No.176: My Daily Life As Eternity

It is tremendously cold today. Even though it is still the middle of September, I turned on the switch of a heater in my room. Hot coffee is my best friend in this season, although I had drunk it everyday even in summer.

My daily life is passing by with fulness and happiness regardless of whether it is cold or not. A better expression might be that my daily life is not passing by but existing as eternity. Thursday, 9/14/2017

1531.「自分の日記」

日記とは何なのだろうか？欧州での生活を始めて以降、「日記」と呼ばれる表現手段について、考えさせられることが何度もあった。そして、今もまだそれについて考えることがよくある。「日々を記す」ということ、記される日々は何であり、日々を記すというのは本質的にどういうことなのだろうか。

これまで度々言及してきたように、日記というのは、私たちを「開く」働きを持つ。「発達」という言葉の語源が「開く」という意味であることからも、日記が持つ自己を開く力というのは、私たちの発達を促進しうる力を持つのは確かだろう。

事実、インドの聖者であるラマナ・マハリシのように瞑想実践をすることなく、内省的に日々を綴ることによって悟りの境地に至った者もいる。また、レオナルド・ダ・ヴィンチやモーツァルト、ベートーヴェン、そしてエドヴァルド・グリーグやエドヴァルド・ムンクが、日々内省的な文書を綴ることによって、各々の活動領域で卓越の境地に至ったことは確かである。

彼らに共通していたのは、日々自己を記すということだった。彼らが記していたのは、それがいかに外面的な出来事や現象であるように思えても、それは必ず自己の内面と関係するものだったのだ。

ここに、自己を開くための文章というのは、そもそも自己の深層と関係したものでなければならないことがわかる。自己を取り巻く表層的な現象をいくら文章にしたところで、それは自己を開くことには一切繋がらない。

文章の出発地点は、徹頭徹尾、自己に立脚したものでなければならない。だが、果たして日記というのは、自己を開くためだけにあるのだろうか？

自己に立脚した形で日々の出来事を記していくことが自己を開くことにつながり、自己を深めることにつながるのは、確かに大きな意義を持つだろう。だが、日々を記すことは、自己を開くためだけにあるのだろうか？どうも私はそれだけではない気がしている。

日記の執筆というのは、一日の終わりだけに行うようなものでは決してない。私は一日の中で自分を捉えてやまないものをできる限り全て捉え、とりとめもなくそれらをこの一年間日記として形に残してきた。

欧州に渡ってからの一年強の期間において、気づけば180万字ほどの日記を書いていた。その経験を経た後にふとして得られた気づきは、どうやら私たちの日々の一瞬一瞬は、生の充実感と幸福感で満たされたものだということだった。

自己が開く開かない、自己が深まる深まらないなど一切問題ではなかった。自分が生きている日々の瞬間瞬間が、生きていることの実感とその充実感、そしてそれらが生み出す幸福感で満たされたものなのだ、という気づきが最も大切なことだった。

人間が生きることに本来不可避に伴う充実感と幸福感を、もう一度自分自身で見つめ直す機会を提供してくれるのが日記という存在であり、私たちが本当にその日を生きたのだということを伝えてくれるのが「自分の日記」なのだ。

原稿用紙たった一枚でいい。一枚の原稿用紙に何も書くことのできない毎日というのはどういう毎日なのだろうか？充実感や幸福感を感じられる瞬間が一つもなかったのだろうか？その日に気づきや発見が何一つとして得られなかったのだろうか？それは自分の人生を生きていることなのだろうか？

© YOHEI KATO 2018

自分の人生を生きることが本質的に充実感や幸福感で満たされたものであり、日々新たな気持ちでこの世界を生き、気づきや発見を得る連続的な流れであるならば、たった一枚の原稿用紙に何も書けない日々は何かがおかしいのではないだろうか。

自分の人生ではなく、誰かによって当てがわれた人生を生きているのではないだろうか。自分の人生を生きる現代人が少ないことはとても辛い。

私たちが真に自分の人生を生きることを妨げるこの現代社会には、大きな病理が潜んでいる。この病理は解決不能なほど巨大であり、その根は深い。しかし、それでも私たちはこの病理に立ち向かっていく必要があるのではないだろうか。

過去も未来も現在も、いついかなる時も社会の病理が消え去ることはない。だが、そうでも病理に屈することなく、日々の生活の中に充実感と幸福感を見出しながら生きていくことが私たちに求められることであり、それを行うことが人間として生きることの本質なのではないだろうか。

これは幻想に過ぎないかもしれないが、私たち一人一人が自分の人生を生きようとし、毎日に充実感と幸福感を感じられるようになれば、社会の病理が治癒されたことにならないだろうか。2017/9/10（日）

No.177: Rebirth and Writing

At this moment, I have nothing to say, but even so, I will write something. Writing has a mysterious power to navigate me into a new realm of my epistemological universe that I have never seen until I start to write.

Whenever I write something to express my thoughts and feelings, I always notice that I enter into a new sphere of my inner universe. Writing not only connects my previous knowledge and experience with my current existence but also opens a new horizon in my inner universe.

Once we finish writing something, we become a new existence. We never come back to our previous existence because we are reborn after writing. Thursday, 9/14/2017

1532. ためらいのない歩み

今日からいよいよフローニンゲン大学での二年目のプログラムが実質上始まる。先週にプログラムに関するオリエンテーションがあり、今日から実際のコースが始まる。

昨夜はいつもと同じ時間に就寝したにもかかわらず、今朝はいつもより一時間以上遅い時間に起き、睡眠をいつもより多く取った。昨日は色々と自分の中で咀嚼するべき体験が多かったためであろうか。

自分自身の身体を十分に寝かせるのみならず、昨日生起した思考や感覚を静かに寝かせるかのように、今朝は十分な睡眠とともに目覚めた。どうやら今日も雨のようであり、早朝から小雨が降っている。空を覆う薄い雨雲が、西から東ではなく、東から西に向かって動いている。これはいつもとは違う動きだ。

偏西風に逆らうように雲がゆっくりと東から西に向かって動いている姿を私はぼんやりと眺めている。雲の動きはとても緩やかなのだが、それでいてどこか力強く映る。偏西風を物ともせずに東から西に向かって進んで行く雲。それは様々なことを静かに私に語りかける。

昨日、ほんのわずかの時間だが、何冊かの和書を手に取った。森有正氏や辻邦生氏の文章に古さを一向に感じないのはなぜだろうか。

彼らの文章を読むたびに、私はいつも何か大切なことに気づかされる。彼らの文章に古さを一向に感じないのは、彼らが普遍的な次元に到達し、その境地から言葉を紡ぎ出しているからではないだろうか。普遍的な次元から紡ぎ出される言葉は、現代に生きる私に少しも古さを感じさせない。そのような言葉には、時代を超えて当てはまる事柄が密に詰め込まれている。そのようなことを思う。

昨日は、午後から学術探究を控え、作曲実践に打ち込んでいた。その進歩は緩やかではあるが、着実なものとして実感できる。自分が作曲を始めた年齢に思いを馳せていると、ふと、30代を迎えてから本格的に絵画を描き始めた父の姿が浮かんできた。会社員をしながら、父が本格的に絵画を描き始めたのは、もしかすると今の私とほぼ同じ年齢だったのではないかと気付いたのだ。

今当時を振り返ると、企業人をしながら絵画の創出に打ち込んでいた父の姿には打たれるものがある。父には手先の器用さと絵画を描く才能が元々あったのは確かだろうが、絵画の特別な教育を受けていたわけではなく、おそらく試行錯誤で一から絵を描く方法を学んでいったのだと思う。

そうした道を着実に歩みながら、素晴らしい作品を数多く残していった父に改めて感銘を受ける。作曲を今の年齢から始めても全く遅くはなく、いつか自分の曲をこの世界に生み出していけるという確信の背後には、当時の父のあの姿がある。今日も何もためらうことなく前に進んで行く一日になる。明日もそうだ。2017/9/11(月)

No.178: Appreciation for One MOOC

I have watched online videos of the MOOC again and again. The course tile is: “Write Like Mozart: An Introduction to Classical Music Composition.”

This is not an exaggeration, but this online course changed my life. To put it in another way, this course has deepened the quality of my life through music composition.

I remember that the course contents were completely over my head the first time I watched them. I did not have any fundamental knowledge of music theory at that time──for instance, I could not read notes at all.

Although I did not have any knowledge of music theory, I had irrepressible zest for music composition. I noticed that something to wait for being expressed as music existed within me.

After I determined to follow my zeal, I began to study music theory in parallel with this course. The more I built my knowledge system of music theory, the more I noticed how valuable this course was.

I suppose that this course is the only one MOOC all over the world to learn music composition for anyone for free. I really appreciate the benevolence of the instructor, professor Peter Edwards. I will learn this course again and again──at least four or five times. Thursday, 9/14/2017

1533. 鏤骨

今日は早朝から大学のキャンパスに行き、二つの講義を受けた。昨日までは『成人発達理論による能力の成長』のオンラインゼミナールの講師を務めていたが、今日からは再び学習者の立場となる。様々な文脈の中で多様な社会的役割を担うことは、私たちの本質的な特徴であるアメーバ的可変性を刺激してくれる。

昨日までは講師の立場を取っていたため、受講生側の立場を取ることは新鮮であり、講師の経験がある分だけ受講者としての観点だけではなく、講師としての観点から講義に参加することができる。この二つの観点は、自らの教授法と学習法を磨く上で非常に有益であることに改めて気付く。

これはおそらく新学期を迎えた誰しもに当てはまることだと思うが、新たな事柄を学習することの期待感に今日は満ちていた。実際に、キャンパスに向かうまでの足取りはとても軽やかであり、意気揚々と天国への階段を上っていくかのようであった。

これから二ヶ月弱の期間が最初のセメスターの前半に該当する。とにかくこの期間は、履修する三つのコースの学習内容を最大限に咀嚼するように努めたい。その方法は至って簡単であり、コースで取り扱う専門書と論文を集中的に何度も繰り返し読むことである。そして、単に読むだけではなく、自分の既存の知識と経験に絶えず引き付けながら読むという行為に並行して、書くという実践が大事になる。

それはどんなに短くてもいい。とにかく、学習内容を自分の深層にまで落とし込み、そこから湧き上がる思考を言葉として書き留めておくのである。この実践をないがしろにすれば、それはもはや学習とは呼べない。単なる死物と化した情報が自己の存在に脂として堆積するだけである。

そうした表層的な情報の肥満化現象を何としてでも避け、強靭鋭利な知識のネットワークを内側に構築するようにしたい。死物と化した情報は一切実用に足りえないが、自己の深層にまで浸透した知識は実用に足りうる。

昨年の様子を振り返ってみると、私は履修科目の専門書や論文と並行して、絶えず自分の関心に従った探究を進めていた。冷静に振り返ってみると、もしかすると自分で選別した専門書や論文を読むことの方が多かったように思う。

自分の内側に沸き立つ知的好奇心に従って、自分の読みたいものだけを選び、それを絶えず読み続けることによって、知識のネットワークが水平的に拡張し、垂直的にも深まったように思う。ただし、履修した項目の内容についてもっと理解を深めることができたのではないだろうか、という反省が残るのは確かだ。

とりわけ、二年目のプログラムである「実証的教育学」は、私にとって馴染みのない領域であるがゆえに、重要なことは、その領域の土地勘を十分に養うような探究を進めていくことだろう。その際に考えられうる実践は、その土地に関係する専門書や論文を集中的に読み込んでいくことだろう。

実証的教育学の枠組みは、現在私が日本企業に提供しているトレーニングプログラムの評価をする上で極めて重要であり、MOOCのプログラム評価を行う際にも非常に重要となる。実務家として、研究者としての私にとって、実証的教育学の理論と手法は不可欠なものであるがゆえに、何としてでも当該領域の土地勘をこの最初の二ヶ月弱の期間に十分涵養したいと思う。

そのためのキーワードとして浮かび上がってきたのは、「鏤骨」という言葉だった。実証的教育学の理論と手法を、自らの肉のみならず、骨にまで刻んでいくような気概を持ちたい。繰り返す必要もないが、ある知識領域の土地勘を養い、その知見を肉と骨に刻むためには、書くことが必要なのだ。

書くことによって、肉と骨に知識を刻む込む。書き続ければ、きっとその知識は自己の深層にまで刻み込まれ、その時に初めて叡智となるだろう。

書く。書く。書く。そして、書く。

肉に刻み、骨に刻み、存在に知識が刻み込まれるまで書く。

書く。書く。書く。そして、書く。

© YOHEI KATO 2018

書かれた内容が自己そのものとなるまで書く。

書く。書く。書く。そして、書く。

人生の最後の日において、その日が最後であることに気づかないほどに書く。書きながら終える。そうすれば、自分の人生は自己の殻を破り、完全に開かれ、終わることがないだろう。それが自分にとっての書くことの真髄だ。2017/9/11(月)

No.179: Evidence-Based Education and My Consulting Work

I am currently exploring the field of evidence-based education. When I more closely examine the approaches, I notice that they are similar to those in business consulting that is my previous professional field.

I am still engaging in consulting work──not for business strategies but for employee training and talent evaluation──, and I think that what I am currently learning at RUG can enhance the quality of my consulting services in terms of program evaluation.

I will spend my most time to learn theories and methods to evaluate intervention programs.
Thursday, 9/14/2017

1534.「学習理論と教授法」「評価研究の理論と手法」のコースについて

今日は久しぶりに大学図書館で学習を行っていた。午前中のクラスを終え、午後からのクラスに備えて課題図書を再度読んでいた。

いつもは、自宅の書斎の机に置いている書見台に専門書や論文を乗せて読んでいるのだが、机の上にじかに資料を置きながら読むというのは身体上非常に負荷がかかると改めて思った。首を曲げ、視線を机に向けるというのは、首や肩への負担が大きく、集中力や学習の質を大幅に下げることに気づく。とはいえ、大学に書見台を毎回持っていくのも面倒であるため、少しの時間であればそれは仕方ないものとして受け入れようと思う。

実際に今日は、二時間弱ほどの時間を図書館で過ごしたが、そのくらいの時間であれば、書見台を使わなくても何とか耐えられる。書見台を活用するというのも、学習環境を整えるという意味では極めて重要であり、それが学習の質を向上させるという意味で、一つの貴重なスキャフォールディングツールとなる。

図書館の窓越しに、秋を予感させる風が吹くのを見て取った。風に揺られた木々を眺めながら、今後は自分の研究室と自宅の書斎の両方に書見台を設置したいと思った。机の上には書見台、椅子はバランスボールであることが、長時間にわたっての探究を可能にしてくれる。世界のどこに行っても、この環境を作り上げることは欠かせない。

少しばかり簡単に、今日参加した二つのコースについて書き留めておく。午前中に参加したのは、プログラムに応募した際の面接でお世話になったダニー・コストンス教授の「学習理論と教授法」というコースである。

クラスに参加してみてわかったが、私を除く全ての受講者はオランダ人のようだった。ただし、コストンス教授からの説明は全て英語で行われた。

今日のクラスのテーマは、学習における認知の果たす役割であり、特に認知の「実行機能（executive function）」について取り扱った。これまで様々な文献の中で、実行機能について度々目にしてきたが、改めてこの機能に焦点を当てることによって、自分がこれまで見落としていた知識に気づき、自らの学習と学習支援を行う際に活用できる知識項目が随分とあることがわかった。

それらの細かな論点をここで取り上げることはしないが、これからの日記の中で、自分の体験と関心に引きつける形で今日の学習項目が何度も適用されるだろう。自分の既存の知識と経験、あるいは現在の関心や体験と結びつかないような知識項目を一切退け、知識項目を剪定する過程を通じて、強固な知識体系を築いていく。しかもそのプロセスを早急に行うのではなく、本日のクラスで取り上げられたように、実践を通じて緩やかに、かつ着実に進めていく。

午後からは、アネケ・ティマーマンス教授とマイラ・マスカレノ教授が担当する「評価研究の理論と手法」というクラスに参加した。このクラスは、全ての種類の「社会プログラム」の評価に関する理論と評価手法について学ぶことを目的にしている。

© YOHEI KATO 2018

社会プログラムというのは、教育に限らず、社会問題や社会情勢を改善するために設計されたプログラムや政策のことを指す。そうしたプログラムや政策を科学的に評価・検証し、より良いプログラムや政策を策定していくことを目指すのが、このクラスの目的であり、より大きくは、私が二年目に在籍するプログラムの目的である。

全七回に渡るクラスの中で、前半の三回は理論の習得に焦点が当てられ、後半の四回はコンピュターラボでの実習を通じて、評価手法を手を動かしながら学んでいくことになる。とりわけこのコースで取り上げられる内容は、研究者としてのみならず、実務家としての自分の仕事と直接的に結びついたものであるため、いつも以上にこのコースの学習内容の習得に力を入れたいと思う。2017/9/11（月）

No.180:Polygamy or Monogamy in Music Composition

Like any prediction contains unpredictability, I cannot promise, but I will probably compose only solo piano works.

I highly admire most composers to create concertos and symphonies in that they are "polygamous," although they might say that they love various musical instruments as a part of family.

I am "monogamous" in that I can devote my love only to one instrument, piano. Hence, I imagine that I will compose only solo piano works as long as I am monogamous. Thursday, 9/14/2017

1535. あの鳥の鳴き声のように

昨夜は久しぶりに大学時代の友人と会った。彼は現在アメリカの大学院に留学しており、彼と最後に会ったのはかれこれ三年前となる。三年の月日はお互いを確実に変化させているようだった。私とは対照的に、彼は大学時代において学業が極めて優秀であり、今所属している大学も米国の名門大学である。

久しぶりの彼との対話を楽しみにしながら、私は待ち合わせの場所に向かった。二人でゆっくりと話す場所として選んだのは、ある中華料理店だった。その店には個室があり、部屋全体がどこかとて

も白く感じさせる作りとなっており、一つ一つのテーブルがとても大きく、それでいてどこか落ち着けるような雰囲気を放っている。テーブルに腰掛けたところで、お互いの近況報告から始めることにした。まずは、会社を退職し、米国の大学院に留学することになった彼の話を聞くところから対話が始まった。

するとすぐに気づいたが、彼の日本語が幾分おかしい。文法的な誤りや発音の誤りなどではなく、根本的に彼が以前話していた言葉ではなくなっていることに気づいたのである。人は内面の成熟に応じて文体が変化するのと同様に、書き言葉の変化が話し言葉に滲み出すことがよくある。

彼が口を開いて一言二言話をした時に、この三年間を通じて、彼の内側で大きな変容体験が起こったのだと最初は思った。しかし、話の続きを聞いてみると、どうもそれが私の早とちりであることが如実になり始めたのである。そこには彼の言葉はなく、他者の言葉しかなかった。

外装の見栄えだけが整った言葉をいくら発しても、何も響いてこないのだ。そんな言葉を発しては、人に何も響かないのだ。

自分の内側にある自己の言葉を見つけ、それを発しない限り、他者に何かが伝わることなどない。仮に自分の言葉ではなく、虚飾で彩られた言葉を発し続ける限り、他者に伝わるのは浅薄さだけなのだ。

彼が留学の経緯に関する話から突然話題を変えた。どうやら、私が執筆した『成人発達理論による能力の成長』を読んでくれたようだ。そこで彼はその感想を述べる際に、西田幾多郎の哲学を取り出した。三文字のある概念を用いて説明すれば、私が本書の中で述べていたことがより深く理解できるとのことだった。

また、本書の内容と東洋における発達思想には随分と関連があり、その点が特に印象に残っているという感想を述べてくれた。自分の書籍を読んでくれたのは大変嬉しいことだったが、彼の感想の全ては私に何も響いてこなかった。

仮に彼の言葉を紙に書き出せば、それはその紙を産んでくれた木に大変申し訳ない。資源の無駄になる無益な言葉を彼は発していた。

© YOHEI KATO 2018

運ばれた中華料理のどれもが見栄えがとても良く、一見すると美味しそうに思えた。だが、彼の話を聞きながらそれらの豪華な食べ物を食べても、一向に美味しさを感じられなかった。

料理も言葉も響くものがなければならないのだ。作り手は、込めるべきものを表現物の中に込める必要がある。そのようなことを思った瞬間に、私は夢から覚めた。

真っ黒な闇が包むフローニンゲンの朝。遠方から甲高い一羽の鳥の鳴き声がした。それは私の内側の芯に向かって一直線に届いた。

叫びにも似た一羽の鳥の声が私の内側に響き渡ったのは、その鳥の声がその鳥自身の内側から湧き出た固有の声だったからだ。2017/9/12(火)

No.181:Context in Word and Music Composition

Our words become meaningful once they are placed in a specific context. I thought that it was true to music. More specifically, I was wondering how musical notes become meaningful in the context of a piece of music. In addition, I was curious about how music notes construct a context.

Because I do not still comprehend how musical notes are placed in a specific context and how they construct a context, it is difficult for me to compose a piece of music.

My next step would be to delve into the nature and constructive process of contexts in a piece of music. Friday, 9/15/2017

1536. 音楽体験の充実をもたらすもの

昨夜の作曲実践はとても実りの多いものだった。一昨日、音楽理論に関するMOOCを幾分受動的に受講していると、脳がどんどん重くなるのを感じた。人の話をただ聞くだけ、書物に書かれたことをただ読むだけ。そんなものは学習でもなんでもなく、自己を深めることに一切繋がらない。

それどころか、そんな学習姿勢では、一昨日の私のように、頭が鈍重になり、停滞と退行しかもたらさない。とにかく手を動かしながら、心の身体を動かしながら、熱量に包まれた形で自己を表現しながら学習を進めていかなければ、何も身に付かないことを改めて痛感させられた。

自分の物理的・精神的身体を動かしながら学習項目と向き合い、そこで得られた知見や技術を即自分で表現し、表現されたものが自分の身になっていくのである。それ以外のものは、自分の身になりえない。無駄な贅肉と必要な筋肉の違いはそこにある。そのようなことを思いながら、学習とはつくづく自己から始め、自己に還らなければならないのだと知る。

学術論文が持つ真の価値は、論文を単に読んでいるだけでは分からないことがある。論文を執筆してみて初めて、論文の持つ価値が真に見えてくる。それと同じことが音楽にも当てはまるように思える。音楽を単に聴いているだけでは分からないことが多々あるのだ。音楽を自分で作ってみて初めて、ある曲の本当の価値が見えてくることがある。昨日の作曲実践は、そのことを強く教えてくれた。

作曲について学べば学ぶほど、過去の偉大な作曲家の曲を見る眼が違ってくる。新たな観点が自分の中に増えれば増えるほど、一つの曲を重層的に捉えられるようになる。観点の増加によって、それらに埋もれてしまい、作品の持つ価値を逆に見失ってしまうのは、観点を獲得する際にそれらを自己の深層を通じて自分の骨身にしなかったからだろう。

観点という知識が増加するに従って、仮に感覚が麻痺してしまうのであれば、それは知識というものをそのような形で取り入れてしまったからだろう。そのような誤った姿勢で取り入れられた知識は、知識が持つ本質的な役割を発揮することを妨げる。そのような知識をいくら取り入れても意味はなく、対象を理解することの妨げとなる。

とにかく、作曲の理論と実践技法を絶えず自己に引きつけて学んでいくことによって、音楽に関する知識が徐々に自分の血となり肉となり、その結果として、一つの曲を重層的に見れるようになってきている。

一つの曲を聴く際に、作曲者側の観点を自分の中に築いていくことによって、音楽と向き合う姿勢が随分と変化し、音楽から得られるものもだいぶ変化した。これまでは単に音楽を聴くだけの消費

© YOHEI KATO 2018

者であり、それはそれで私の人生を豊かにしていたが、曲を創出する側に回ってみると、音楽が私の人生をさらに豊かなものにしてくれていると実感する。

一つの対象と向き合う立場を変え、その立場に固有の観点を内側に構築していくと、見えてくるもの、そして得られるものが全く変わるのだということを改めて知る。それでは、演奏者の観点を自分の内側に構築してみると、音楽を見る視点、そして得られるものはどのように変化するのだろうか、ということが気になり始めた。

普通、作曲に携わる人間は、ほぼ誰しもが演奏者としての音楽経験を持っているものなのではないかと思う。私にはそうした経験が一切ない。

上記で書き留めていた自分の考えを用いれば、どうやら演奏者になってみないとわからないことが多々あるようだ。作曲に並行して、何らかの演奏手段、具体的には、自分の関心を最も強く引く、ピアノという楽器を演奏する鍛錬もいつか積んでいきたい。この鍛錬は、作曲実践をより豊かなものにし、音楽体験をさらに深く実りのあるものとし、それが人生に充実感と幸福感をもたらしてくれることにつながるように思えて仕方ない。2017/9/12(火)

No.182: To Be Both a Scholar and Composer

I spent enough time to think about how to pursue both career tracks as a scholar and composer. It looks a thorny path, but I want to walk on both tracks simultaneously in a serious way.

I came across the fact that a French philosopher, Jean-Jacques Rousseau, was also a composer. I immediately listened to his music, and I was surprised by the quality of his work.

Alexander Borodin, who was a Russian composer, was a professional chemist, having had a significant contribution to chemistry. I regard Borodin as my role model to pursue both academic work and music composition. He gives me a hope to be both a scholar and composer. Friday, 9/15/2017

1537. コードトーンの抽出からの作曲

昨日は午前中と午後に大学での講義に参加し、帰宅してからもしばらく学習項目の振り返りをしていた。そのため、学術研究がひと段落したのは就寝の二時間前であった。そこからその日の作曲実践を始めたのだが、自分の進歩をまた実感することができるような体験をした。

昨日は、モーツァルトのピアノソナタ16番の出だしの箇所を参照し、コードトーンだけ抜き出すという分析をまず行った。その後、モーツァルトが用いたコードトーンを自分なりにアレンジする形で曲を生み出していった。もちろん、モーツァルトの原曲の方が洗練されているのは万民に明らかだが、生み出されたその曲は確かに私の曲であり、とても愛着を持った。

書籍の執筆と同じように、自分で作り出した曲はまさに自分の子供であるかのように愛情を持つものなのだ。過去の偉大な作曲家の曲に範を求める方法をこれまで模索していたが、一つはコードトーンを抜き出すということは非常に有効かもしれないと思った。

現在繰り返し視聴している、シンガポール国立大学が提供する作曲の講座はとても有益であり、その中でノンコードトーンというものを学んだことを思い出した。昨日分析を行ったモーツァルトの楽曲は、偶然にも全てコードトーンだけで構成されていたが、ノンコードトーンが組み込まれた曲ともこれから何度も出会うだろう。その際には、まずコードトーンだけ抽出し、原曲の中でどのようにノンコードトーンが用いられているのかを分析し、自分の中でアレンジをしながら曲を生み出すということを行っていきたい。

全くまっさらな状態から曲を生み出すことは、今の自分では到底不可能である。そのため、まずはこのように、過去の偉大な作曲者が残した曲を元にして、曲の分析を経て、アレンジすることによって曲を生み出していきたい。一つの小節内のコードを特定することもまだまだ時間がかかるが、この実践を続けることによって、曲の分析と曲を創出することの双方が手に馴染んでくるだろう。

しばらくはこの実践を愚直に継続させたい。既存の曲のコードトーンから自分の曲を作っていく道を見出したのはいいが、一方で、自分の内側にあるメロディーから曲を作るにはどうしたらいいのかがまだ見えていない。

自分の内側には表現を待つメロディーが無数にあるのだ。これはまだ本格的に実践しているわけではないが、時折私は、何も考えることなしに鼻歌を歌ってメロディーを生み出し、それを録音することを行っている。今後は良いメロディーを思いついたら、逐一録音しておきたいと思う。だが、その前に良いメロディーを生むための鍛錬をする必要があると思う。

昨日も大学から自宅に戻る時にノーダープラントソン公園を通り抜け、その時に鼻歌を歌っている自分がいた。今後は日々の隙間時間に、メロディーを自分の身体から生み出すような鍛錬を行いたいと思う。とにかく、まずは自分の中からメロディーを数多く創出する実践を積み重ねていく必要があるだろう。その継続的な実践の先に、良いメロディーが少しずつ生まれてくるだろう。

今後は少しずつ、そうした自分の内側から湧き上がったメロディーを実際の曲の形に仕立てていく方法と技術を習得していきたいと思う。今日は午後から、ベートーヴェンの楽曲に対してコードトーンを抜き出し、それを元に自分なりの曲を作るという実践を行いたい。2017/9/12(火)

No.183: Unique Affordance in Every Place

Our thoughts and feelings are cultivated by affordance from the external environment.

I often observe myself that the surroundings construct and nurture my thoughts and feelings. Without counting the number of countries that I visit for travel, I have lived in Japan, the US, and the Netherlands so far. In the last ten years, I lived in Tokyo and Osaka in Japan, and San Francisco, New York, and Los Angeles in the US. I am currently living in Groningen in the Netherlands.

From that experience, each one of the places uniquely shaped my thoughts and feelings. More accurately, the places constructed my being distinctively because affordance is divergent in each place and culture. Friday, 9/15/2017

1538. 虚ろな目をした人々

真っ暗闇の中、木々が不気味に風に揺られている姿がかすかに見える。早朝、小雨が書斎の窓ガラスに吹き付けているのを見て取ったところで、一日を開始させた。

フローニンゲンの街の朝夕はすっかり寒くなった。それらの時間帯においては本当に暖房をつけることを検討してもいいだろう。

少しばかり強い風が外の世界を吹き抜けていく音が聞こえる。書斎の中では幻想的なドビュッシーの曲が鳴り響く。

鬱蒼とした闇の世界を眺め、それとは対照的かつどこか共通なものも内包するドビュッシーの曲を聴きながら、私は昨夜の夢について思い出していた。正直なところ、あまり思い出したくない内容だったのだが、夢のシンボルはそれを再想起させることを私に要求している。

再想起を強いてきたシンボルについて書き留めておきたい。私は随分と馴染みのある町にいた。それは実家のある地元の町だった。

私は地元の駅から、駅に近い今の家に引っ越す前の自宅に向かって歩こうとしていた。駅から以前の自宅まで仮に歩くのであれば、それは一時間半以上かかるのではないかと思う。だが、それでも私は歩くことにした。道中にある起伏の激しい山を越え、どこまでも続くかのような国道線を歩いていた。

この国道を仮に二つに分けるのであれば、片側は山側の道、もう片方を海側の道と呼ぶことができるだろう。私は海側の歩道に沿って歩き続け、ある地点で足を止めた。それは単純に横断歩道に捕まったからである。左右を確認し、車が来ていないことを確認すると、赤信号であったが私は横断歩道を渡った。

横断歩道を渡りきると、そこで私は山側の歩道を歩いていこうと思い立った。先ほどの横断歩道を渡りきったところに、ちょうど海側の歩道から山側の歩道に行ける横断歩道がある。この大きな国道を渡るには、この横断歩道を渡るのが一番安全だ。普段はあるはずの横断歩道の押しボタンが見つからず、少しばかり戸惑ったが、時間がきたら青に変わるだろうという軽い気持ちで私はその場に立っていた。

しかし、いつまで経っても信号が青に変わる様子がなかったので、赤のまま渡ることにした。その時、背後に人の気配がしたのでふと後ろを振り返ると、私の後ろに何十人もの人が信号を待っているこ

とに気づいた。だが、彼らの目はどこか虚ろであり、黒や灰色の影が彼らの背中越しに見える。彼らのその虚ろな目では、この世界が鮮明に見えていないようなのだ。

私は、この見晴らしの良い国道の左右を念のため確認し、横断歩道を赤で渡り始めた。道の真ん中まで私が先頭を切って歩いていると、そこで私は足を止めた。どうも私の後ろにいた人たちは、自分で国道の左右を確かめることなどせず、虚ろな視線を地面に落としたまま、単に私の後をついてきているようなのだ。

私が道の真ん中で立ち止まった時、人々はぼんやりとしたまま惰性で横断歩道を渡り続けていた。

そこで突然、一台の乗用車がものすごい勢いで山道を駆け下り、左折をし、横断ほどに侵入してくるのが見えた。車の侵攻方向には一人の女性が虚ろな目をしたままゆっくりと横断歩道を渡っており、「危ない！」と私が声を出す時間がないほど瞬く間に、車がその女性をはねた。

私の目には、車にはね上げられ、宙を舞う女性の姿が、車の速度とは対照的にスローモーションで見えた。その女性は頭から国道に叩きつけられ、頭蓋骨とアスファルトの道がぶつかる鈍い音が響き渡った。

その音が人々の目を覚ますことになったのか、虚ろな目をしていた人々が我に返り、女性の元に駆けつけた。しかし、彼らはどうしていいのかわからず右往左往しているようであり、「すぐに救急車を呼びます！」と私は声を発した。

車の速度と女性がはね上げらた高さ、そして何より、そのまま頭から真っ逆さまに国道に叩きつけられ、頭蓋骨が砕ける鈍い音が聞こえた私にとって、もう手遅れだろうとわかっていたが、それでも救急車を呼ぶことにした。

私は救急車が駆けつけたのを確認したところで、山側の歩道を再び歩き始めた。歩道を一歩一歩あるくたびに、頭蓋骨がアスファルトの道にぶつかるあの鈍い音が聞こえるかのようだった。2017/9/13（水）

© YOHEI KATO 2018

No.184: No Beginning and No End

There is no beginning and no end in our reality.

The weather in Groningen in this season is very unstable. It suddenly began to rain in the evening. Taking a glance at rain, I immediately realized that it was not the beginning of rain because I noticed that sunshine would come soon.

The point is that the beginning of something already foretells us its end and a new beginning after the end.

We may be able to admit that there is no beginning and no end in our reality because everything always includes a beginning and end simultaneously. This principle can be true to our life. Friday, 9/15/2017

1539. 一喝の音

書斎から見える視界が少しずつ開けてきたが、今日も天気は雨模様だ。昨年の今頃は、これほどまでに雨が降ることはなかったように思う。

この街で生活をするのは二年目であり、どちらが正常なのかわからないが、このように雨が続くのは少しばかり異常なように思える。雨の多さに相まって、気温に関しても、昨年よりも随分と低い。

今日は早朝に「実証的教育学」のクラスがあるため、暖かい格好をして出かけようと思う。今このように、外側の景色と今日のこれからについて書き留めたが、それは間違いなく何かから気をそらすためになされたものである。

やはり、昨夜見たあの不気味な夢についてもう少し自分なりに消化をしておく必要がある。夢のシンボルを生み出したのは私の無意識であり、そこには私に何かを伝えよとする意味が存在しているはずなのだ。

最も印象に残っている場面だけを取り出して再度夢について振り返ってみると、国道を渡る私の後ろをついてきた人々のあの虚ろな目を忘れることができない。人は希望を失うと、あのような目をするものなのだろうか。

人は生きる目的を見失ったとき、あのような空虚な目を持つことが可能なのだろうか。世界を空虚なものとしてしか見ることのできない空虚な目。それは極めて薄気味悪いものだった。

また、彼らの背中越しに見えた灰色や黒色の影は何だったのだろうか。それは物理的に目に見える影だった。本来、目に見える影は地面に落ちるはずである。しかし、それが地面に留まっておられず、人の背中に張り付いたかのように見えたのである。

薄気味悪い影を背中に抱え、虚ろな目で下を向きながら歩くことしかできない人々は、意志を持つはずの人間には思えなかった。自分の意志を持たず、自分の目を失った人々が私の後を単につけてくる姿はとても不気味だった。

私が歩みを止めた後、彼らは一度進み始めた自らの足を止めることなどできず、惰性で歩き続けていた様子も印象に残っている。生きる目的を失い、自らの意思を喪失し、行動の判断軸を自分以外の何かに委ねてしまった人たちは、一度何かの行為を始めると、もはやその行為を辞めることができなくなってしまうのだ、ということを象徴しているように思えた。

現代社会を生きる私たちには、今どのような生きる目的があるだろうか。どのような充実感を持ちながら日々を生きているだろうか。

生きる目的を喪失し、日々に充実感を感じられなくなってしまった時、私たちは夢の中にいたあの人々のようになってしまう。空虚な目で世界を空虚にしか捉えることができず、日々の一瞬一瞬が惰性で過ぎ去っていく。それは人間が人間として生きる真の姿だと言えるだろうか。

横断歩道を渡る女性が車にはねられ、頭蓋骨がアスファルトに叩きつけらた時に発したあの鈍い音。あれは私たちを目覚めさせる一喝の音に思える。その音で、夢の中の人々は確かに目を覚ました。空虚な目を捨てて、もう一度人間の目を持ったのである。

© YOHEI KATO 2018

それは少しばかり、希望を投げかけているように思える。今、現代人がどれほど虚ろな目をしていても、再び自分の本来の目を取り戻せる可能性が残っていることを意味しているように思えるのだ。ただし、それを引き起こすには、あのような一喝の音が必要なのかもしれない。

夢の中の女性は、厳密には頭のてっぺんから地面に叩きつけられたのではなく、前頭葉のある額の部分からアスファルトに叩きつけられた。前頭葉は、私たちの思考をつかさどる場所であり、意思的な判断をつかさどる場所である。現代人が自分の目を取り戻し、生きる意味を見出すためには、現在の思考と意思を打ち砕くような一喝の音が必要なのだろう。2017/9/13（水）

No.185: Encounter with Myriads of Gods

I had a dream to see tons of statues in a cave of the bottom of the sea. These statues represented myriads of gods in this reality. I was struck with awe.

I was passing by each statue slowly to show my respect. Suddenly, every statue started to smile at me. Their smiles made me relieved and peaceful from the bottom of my heart as if I could completely surrender myself to that moment.

I have never experienced such a sacred and blissful moment. Saturday, 9/16/2017

1540. 台風のような一日

今日は台風のような一日だ。先ほど午前中の講義を終え、自宅に戻ってきた途端に激しい風と共に雨が降り始めた。

自宅に戻る最中は幸運にも雨は降っていなかったのだが、どこか雲行きが怪しく、途中で小走りをしている自分がいた。天気予報を通じて、昼前から天気が崩れることがわかっており、もしかしたら天気が崩れる時間帯が少し早まったのではないかと感じられ、無意識的に小走りをしている自分がいた。

自宅に到着して、ほんの数分も経たないうちに、外の世界は激しい風と雨に包まれた。先ほど私が感じていた直感は正しく、先ほど小走りをしていなかったら、今頃自分はこの激しい風と雨の中にいたのだと思う。

北欧旅行の時にも感じたが、自分は天候に関して随分と恵まれているように思う。今朝も出発の30分前には大雨が降っていたのだが、私が出発をする時には雨が止んでいた。そして、先ほどはまさにボタンの掛け違いほどの単位の時間差で、激しい風と雨を逃れることができた。天気というのは人為的に手を加えられるものではないことを考えると、つくづく自分はとても運がいいのだと思う。

今日は午前中に、「実証的教育学」のコースの最初のクラスに参加した。月曜日にはすでに、「学習理論と教授法」と「評価研究の理論と手法」のクラスが行われ、それらのクラスはどちらも受講者が多かった。どちらもおよそ60人ぐらいの受講者がいたのではないかと思う。一方、本日のクラスが行われる教室に到着した時、開始数分前にもかかわらず、最前列の席に四人の受講者が腰かけているだけであり、その他の受講者は見当たらなかった。

そして、クラスの開始時間になった時には、結局合計で七人の受講者しかいなかった。このコースを担当するハンケ・コーパーソウク教授曰く、七人で全ての参加者だそうだ。

月曜日の二つのコースが規模の大きいクラスであったため、この小規模なクラスにはとても親しみを覚えた。教授と受講者、そして受講者同士の距離がとても近く、講義中の質疑応答が行いやすい。

最初に受講者同士で自己紹介を行ったところ、グルジアから交換留学で来た一人の女性と私を除き、あとは皆オランダ人だった。ただし、所属しているプログラムはほぼ全員異なっており、教育という軸は同じだが、関心の多様性が確保されたグループではないかと思う。

本日のクラスでは、実証的教育学の概要をメインに取り上げ、クラスの後半では最終課題について説明を受けた。最終課題では、ある学校をケースとして取り上げ、その学校の教育プログラムの質の改善に向けた施策を練ることである。

現在の私の強い関心は成人教育にあるが、人間の発達というものが生誕から一生涯にかけてなされる包括的なものであるという性質を踏まえると、子供たちの教育は極めて重要な意味を持つ。

今回の課題について案を考えていた時に、とっさに思いついたギフティッド教育を最終課題の題材として、このコースを通じて子供たちの教育について理解を深めていこうと思う。2017/9/13（水）

No.186: Reconsideration of My Work

I have recently lost the meaning of scientific research. Yet, I cannot relinquish my scientific endeavor to engage in and contribute to our society.

Over the last couple of years, I have researched on digital learning. My research theme does not change.

I will devote myself to educational science and philosophy of education. I believe that education is one the most significant domains to emancipate us in this modern society because it interconnects with almost all of the other realms in our society such as economy, public health, politics, and so on. Saturday, 9/16/2017